

## 東京都脳卒中地域連携パス 今後の展開について (議論のたたき台)

### 急性期から回復期、在宅医療のパスについて

現在、既に都内で 10 種類以上のパスが活用されている実態があり、これら多くのパスが活用されていることのメリット、デメリットはあるが、現状で、これらは既に関係医療機関等に十分浸透している。また、在宅医療のパスについても、同様に既に活用されている実態がある。

そこで、これらのパスの活用状況を尊重し、パスの統一化をただちに目指さなくてもよいのではないかと。

複数パスが活用されている現状のデメリットを補う意味で、以下の方策をとってはどうか。

#### 東京都における脳卒中地域連携パスの「標準項目」の明確化

各パスの項目から、脳卒中地域連携パスとしての標準的な必要項目を抽出し、「東京都脳卒中地域連携パス 標準項目」として整理する。

#### 標準的パスとしての位置づけ(公表)

当該「標準項目」情報が掲載されているパス様式については、連携に必要な情報が連携先に引き継がれるものであることを、都として都民や関係医療機関等に公表(例-ホームページ上に掲載)する。

#### 各標準パスの参加医療機関一覧の作成と公表

当該「標準項目」情報が掲載されているパスについて、パス間の相互の連携を促すためにも、各参加医療機関の一覧を都民及び関係医療機関に公表(例-ホームページ上に掲載)する。

#### による都民へのメリット

##### ・パス活用による円滑な連携への安心

パスを適用された場合、そのパスによって、「標準項目」情報が連携先に引き継がれることを確認し、安心できる。

##### ・パスをまたいだ連携への安心

当該パス活用機関以外の医療機関に引き継がれた場合でも、移行先医療機関が「標準パス参加医療機関一覧」に掲載されていれば、標準項目情報は当然のこととして引き継がれることが確認でき、安心できる。

##### ・脳卒中地域連携パス活用機関そのものへの安心

現在かかっている医療機関や転院先の医療機関が標準的パス活用医療機関であり、連携に実績のある医療機関であることが確認でき、安心できる。

## 平成22年度東京都脳卒中地域連携パス合同会議の実施方法について

各パス事務局に、東京都脳卒中地域連携パス合同会議に対する意見・評価を聞き取ったところ、「都合同パス会議以外にパス独自の会議を開催している」、「年5回の開催数が多い」という回答があった。その一方で、「他のパスの動向がわかって良い」という意見も寄せられた。

### < 回復期リハビリ病院へのアンケート調査の提案 >

このことから、回復期リハビリテーション病棟を持つ都内の全医療機関に対して、地域連携パスの運用状況、パス会議の開催状況等に関するアンケート調査を行なって、平成22年度の都合同パス会議の実施回数・形式を見直して、情報の共有化というメリットは生かしつつ、複数のパスを取り扱う回復期の医療機関の負担軽減につながる開催方法を検討してはどうか。